

神の沈黙からくる苦悩 : Wise Blood における預言者の闘争

伊東, 孝子
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/16025>

出版情報 : Comparatio. 7, pp.50-62, 2003-04-20. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



神の沈黙からくる苦悩

- *Wise Blood*における預言者的闘争-

伊東孝子

I

フラナリー・オコナーと deep South (深南部) をめぐる種々の批評言説を考慮に入れずに作品群の問題を論ずることは不可能であろう。さらに限定された領域についても留意すべきであると考えられる。メンケン¹が、アメリカ南部を「聖書地帯」と呼んだのは、およそ 1919 年頃であった。留意すべきはプロテスタント主流の「聖書地帯」であることだ。そのような環境の中で残された命ある時間の限定と、生活空間の限定、そしてとりわけ宗教的限定という生きる領域の限定が付加されていたことも忘れてはならないだろう。

しかし限定という言葉を打ち消すほどの率直な意見や主張が彼女の書簡集 *The Habit Of Being*² やエッセー集 *Mystery and Manners*³ の中から明確に読み取ることができる。この 2 冊は作品の解釈の手助けとなるばかりでなく、オコナーの生活して物語りを創造する日々の充足感に満ち溢れた息吹きを、目の当たりにする事さえ可能にすると思う。大江健三郎はフラナリー・オコナーを意識的に取り上げて密接に関わろうとしているようである。例えば *The Habit Of Being* から由来して『人生の習慣』とつけたと述べている⁴ し、日本人のオコナー研究者を主人公にして、その辛い経験を描いた小説『人生の親戚』⁵ を書いていることから分かる。大江は言う、「そこで私がとくに語りたいのは、フラナリー・オコナーの根本思想のひとつとっていい、『人生の習慣、habit of being』ということについてなんです。それはちょっとわかりにくい考え方で、しかもいったん理解すれば、若い皆さんの、それこそこれからの人生、生きてあること being のために役に立つとおもいますから。じつは、私はそれについて本当は自分の娘に話したかったんだと思います。」⁶ being を「生きてある、人生」と解釈している。大江が彼女の作品群に内包されている根本思想を抽出した一つの提示であると思える。オコナー自身も物語り構築の根本をなしていると思われる言説を随所で繰り返す。

Manners are of such great consequence to the novelist that any kind will do. Bad manners are better than no manners at all, and because we are losing our customary manners, we are probably overly conscious of them; this seems to be a condition that produces writers.⁷

There are two qualities that make fiction. One is the sense of mystery and the other is the sense of manners. You get the manners from the texture of existence that surrounds you. The great advantage of being a Southern writer is that we don't have to go anywhere to look for manners ; bad or good, we've got them in abundance.⁸

しかしながら manners に対する解釈の仕方により後に論じる物語りの分析の方向性が違って来る可能性が生じると思う。ここではマナーが複数形になっていることを考慮すれば、「(国民、民俗、階級、時代などに支配的な) 風習、慣習、風俗、習俗」という意味がある。この意味を選択するならば、オコナーが意図しているのは、現実の習俗のようなもの、つまりある時代のある環境の中での人間の生き方の様式とか生活のスタイルといったものであると考えたい。更に具体的に述べれば、人間が日々生きていて生じる細々とした側面というような解釈でいいのではないか。このように解釈すれば、先きに述べたオコナーの主張は作家が小説を書く時は、緩やかに長い間進行している現実の習俗をよく見て、そのあり方をとらえなくてはならないし、その現実在即して表現する必要がある、さらにその表現の礎となる想像力の行き着くところに mystery が潜んでいるのだということであろう。Mystery の意味を明らかにして、カトリック的解釈を試みるならば、「秘義」または「奥義」⁹である。この解釈枠組みに沿ってオコナーの言説 “the main concern of the fiction writer is with mystery as it is incarnated in human life.” (*Mystery and Manners*, p. 176) を解釈するならば、彼女の物語りは聖書の物語りと類推できるものであると考えていいのではないだろうか。このような作家の「習俗」と「奥義」は作品の登場人物に反映され展開されることがあると考えられる。

II

Wise Blood は “It is a comic novel about a Christian malgré lui,” (*Mystery and Manners*, p. 114) とオコナーが言っている長篇小説である。この長篇は5年の歳月をかけて完成させたが、この小説の決定稿を出して数週間後に自分自身の病名を知るところとなり、宿命を帯びた小説家としての出発点となったデビュー作と考えられる。

本論では *Wise Blood* がラジカルなイエス・キリストの世界を物語り、その方法として旧約聖書の世界をオコナー流に再構築し、個人の生を変革する可能性を明示している点を重視して論じたい。

Kathleen Feeley が “*Wise Blood* is an extreme treatment of alienated man's search for 'home'.”¹⁰ と指摘している。彼女の指摘する alienated man は主人公 Hazel Motes のことであると思うが、「疎外された状態」にいる主人公は「疎外」という拘束と物語りの最初から最後まで闘争している。なぜ Hazel Motes がこの状況に至ったのかを明らかにし

たい。

*Wise Blood*はテネシー州イーストロッド出身で、軍隊を除隊したばかりの22歳の青年の闘争物語りである。南部のトーキンハム市に立ち寄った時に、盲目の巡回牧師と名乗る Asa Hawks に魅せられて、その町にそのまま留まる。なぜ盲目の巡回牧師に魅せられて、過剰と言える程の数々の奇妙な言動をおこすのだろうか。そこには子供のころからの習俗が大きな影響を及ぼしていると考えられるのである。幼い時期から日常的な習慣として身につけてきた habit (習慣) は manner (習俗) として彼の性格と心を形成してきた。その当時は未熟ゆえに受動的な感情としてのみ処理しなければならなかったが、今は能動的に実践できる状況におかれている。そして更に行動を起こさざるを得ないという心的拘束状況に至ったからだと考えられるが、そこには祖父の影響を色濃く受けているものと思う。

Hazel の祖父は巡回牧師を生業としていた。彼はその祖父との関わり合いから多くの束縛を受けざるを得ない環境に置かれていた。祖父は3つの郡をフォード車で巡回して最後に故郷イーストロッドに帰って来た時の説教の一部は幼い Hazel を指差して叫ぶ習慣があった。イエスに取り憑かれた祖父の限定的で狂信的な説教によって突き付けられた数々の罪の意識を、幼いながらも、すでにイマジネーションとしてだけではなく理性でも捉えていたのである。“There was already a deep black wordless conviction in him that the way to avoid Jesus was to avoid sin.” (p. 11)

その理性が Hazel の心の中で確信していることを実行に移す選択をする。この Hazel の子供時代にはオコナーが作家として描きたい性格描写を忠実に表現していると思われるのである。彼女は好んで意図的に天使性と悪魔性をあわせ持つ存在感溢れる子供に仕上げていと思う。つまり子供は大人が考えているよりは彼等の持つ知的機能を上手に使う事ができるし、意志に対する子供なりの誇りもあるのだというのがこの場合の作家としての視点であると考えられる。これらのことは3章の回想シーンで、その特徴を顕著に表していると思われる。Hazel が10歳の時に父親と二人で行ったカーニバルで、たまたまストリップショーに紛れこんだものの、父親がだらしなくダンサーに向けて投げかける淫らな言葉に驚愕を覚えるのであるが、さらに帰宅して母親にそのダンサーをオーバーラップさせるのである。そのことで罪悪感という自我の目覚めを意識する。息子の異様な雰囲気を読める母親が放つ厳格な宗教的威圧によって Hazel は罪の意識を加速させていき、苦行 (self-mortification) を行うのである。

He took them [his shoes] out of the box and filled the bottoms of them with stones and small rocks and then he put them on. He laced them up tight and walked in them through the woods for what he knew to be a mile, until he came to a creed, and then he sat down and took them off and eased his feet in the wet sand. (p. 36) 10歳の子供が自らの意志によって苦行を行ない (“He thought, that ought to satisfy Him.” (p. 36))、彼はイエスからの返事を待つのだが、何一つの変化やしるしも顕われずに、罪

に対する恐怖だけが増加していく。それは “deep black wordless conviction” (p.11) としてイエスを避けることが唯一の方法であると認識して、畏敬の裏返しとなる狂信的な行動に移るのである。

III

表題に付いている Blood、「血」は聖書においてはイエスの言葉として解釈されると思われる。¹¹ しかしオコナーは Hazel が持っている、しかも賢い血と述べている。¹² この関連性について考えてみたい。彼女は生っ粋の南部の人間について少しの躊躇も無しに端的に述べる。“The Southerner is usually tolerant of those weaknesses that proceed from innocence, and he knows that a taste for self-preservation can be readily combined with the missionary spirit.” (*Mystery and Manners*, p.110)。この南部人こそオコナーが物語りを紡ぐ時の主要人物として必要であり、彼女が最もよく掌握している隣人達なのである。Marshall Bruce Gentry が指摘するように、この南部人は「自分達以外の他の世界とは関係をたっている」。¹³

22 歳の Hazel は、反福音主義者となって伝道を始める。祖父の伝道とは対極的方法である罪を経験することで、罪を信じない方法意識を明確にして、直接行動をおこす選択をする。

He felt that he should have a woman, not for the sake of the pleasure in her, but to prove that he didn't believe in sin since he practiced what was called it;... (p. 62)

Deep South は誰でもが伝道師になり、自らの伝道魂を公衆の面前で発揮しやすい土壤であると言われるが、この Hazel の特異な風貌はオコナーの含蓄豊かなメタファーとして読み取ることができると思う。彼の着ている衣装は “Once outside in the light, the new suit turned glare-blue and the lines of the hat seemed to stiffen fiercely” (p. 13) と描写される。それまで着ていた軍服に替えて、このような衣装を纏わせることで文脈を変化させ劇化させる効用を作家は意識していたし、物語りが別の側面に運動を開始することを意図していたのである。

Hazel を “alienated man” であると指摘したが、彼が闘争を遂行するための過程で出会う人物達も疎外された立場に置かれた人物像として描かれている。たとえば売春婦の Mrs. Watts は旧約聖書の「知者たちは、経験の乏しい若者に対して、愚かな道にひきずりこもうとする誘惑を警戒するよう促す。愚かな道とは、墮落した女の誘惑である。」(箴言 7 章 5-27 節) と重ね合わせられる。さらに Mrs. Watts は母親のような含みを持たされている。ストリップダンサーに母親をオーバーラップさせたように、売春婦と母親を二重写しにさせる。

ここで注意すべきは、このように論ずれば、医学的検証の類推を行う言説もあるだろうが、作家自身がそれを否定していることを明記しておきたい。¹⁴

オコナーは Hazel が罪に向かっていくために具体的な行動をおこす状況設定を準備する。そのために投入されるのが、自ら「賢い血」を持っていると主張する Enock Emery である。少し精神薄弱であるが自らの血が促したゆえに Hazel につきまとい、Hazel の次ぎの説教を街頭で聞き、ある決意をする。

The Church Without Christ don' t have a Jesus but it needs one! It needs a new jesus! It needs one that' s all man, without blood to waste, and it needs one that don' t look like any other man so you' ll look at him. Give me such a jesus, you people. (p. 80)

Enock は“without blood to waste”と聞いて、ある物体を思い浮かべるのである。しかも‘new jesus’であると思いついていようである。さらに‘new jesus’を見せることを使命として奇妙さが突出している会話を連ねるが、これらの対話をただ単に奇てれつなものとしてだけで解釈すれば、この物語のプロットを骨抜きにしてしまうだろう。この少年は博物館に眠っているミイラを‘new jesus’であると信じ込んで盗みだす。事実しなびて皺が寄っているミイラは無駄にするような血は持っていないのは当然である。彼は Hazel の元へとミイラを運び込むが、そのミイラは最終的には Hazel によって壊されて塵となる。この‘new jesus’のモチーフになったミイラには古代エジプトの死生観が存在していると考えられる。その当時の人々の死に対する恐怖心と再生の思想とに結びつくのである。死して後にあの世で復活したい、そのために復活した時に魂が戻るころとして自分の肉体をミイラにして残しておくと考えたのだ。つまりミイラなくして復活はありえないことになる。それを考慮に入れて、このプロットを推し量ればミイラは Hazel がイエスを冒瀆する説教をするための表象として生きてくるのではないだろうか。さらに‘new jesus’であると思われるミイラが塵となり土となるプロットは創世記を重ね合わせて見ることができるとされる¹⁵。し、物語り全般に神学用語が頻繁に使われていることが確認されよう。しかも正統的に神学用語を使うのである。一例をあげると、Hazel が街頭で説教をする場面におけるイエス・キリストの使い分けに見られる。イエス・キリストの場合には Jesus と使い、Hazel が望むイエスには小文字の jesus, one, him と使い分けている。目的を持って使い分けているように思える。Hazel に激しい口調で説教を繰り返し行わせるシーンは旧約聖書に書かれている預言者のアナロジーと考えられると思う。

IV

Sally Fitzgerald はオコナーの信仰に対する姿勢を次のように述べる。

She liked to discuss ideas, and she liked to discuss theology, and she made a striking apologist for Catholicism, which was, to say the least, an arguable system of belief and thought to many, even most, of the people she wrote to. This faith was her intellectual and spiritual taproot, and it deepened and spread outward in her with the years. Her real love for Christianity and for the Church as its guardian is inescapable in her letters, and so is her impatience with fatuity and obtuseness among Catholics.¹⁶

と *The Habit Of Being* のイントロダクションで述べている。オコナーがカトリシズムを強烈に弁護する人であると考えれば、その信仰体系を熱く論じていることも理解できよう。そのローマ・カトリック教の信仰は旧約聖書と新約聖書を「神の御ことば」としている。彼女は *Wise Blood* の中にひるむことなく「御ことば」を強力な物語り言説の道具として顕現させているように思われる。

さらにオコナー特有の想像力¹⁷ を行使して創造した人物 Asa Hawks は ‘blind preacher’ と自称する ‘fake blind man’ であり、Hazel の興味をかき立てる詐欺師である。彼は聖書の言葉を引用して、かろうじて体裁を保つことができていることが見てとれる人物として描かれている。Hazel は “to prove that he didn’t believe in sin since he practiced what was called it,” (p. 62) という目的のために Asa Hawks の娘を誘惑するが、反対に Hazel の裏をかく相談をしている時も、聖書の言葉を持ち出す。“That might be the oil on Aaron’s beard.” (p. 62) 、これは旧約聖書の詩編¹⁸ からの引用である。アロンは神の怒りを遠ざける有力な仲介者なのである。¹⁹ 根っからの詐欺師である Asa Hawks は一石二鳥の方法を企むのである。Asa Hawks が本当に盲目か否かを確かめようと付きまとう疎ましい存在の Hazel を遠ざけるために、以前から捨てようと考えていた娘に Hazel を誘惑させ、油断させておいて、その隙にバナナボートに乗って逃れようとする。そのために聖なる仲介者アロンを引き合いにだして、自らをアロンの立場に置き自己正当化しようとする、ねじ曲がった狡猾な摺り替えを図る。彼は更に言う、“He blinded Paul” (p. 63) 「キリストはパウロを盲目にした」(使徒言行録 9 章 1-9 節) と。迫害者パウロをキリスト教徒へと変貌させた、この神聖なるキリスト体験を Asa Hawks の口から語らせることによって、その後のプロットの進行を皮肉なものへと展開させる。オコナーの宗教的信条が最終章の Hazel の姿に明確に影響を及ぼすのである。

Hazel が闘争するたの手段として重要な役割をはたすのが「車」である。過去の習俗と現実の具体的事実をリンクさせるための唯一の物的表象となる「車」は彼の祖父も使っていたが、Hazel の車に対する意図は祖父の意図とは明らかに異なっている。David R. Mayer が指摘する²⁰ 抵抗するための手段としての解釈だけではなく、Hazel の “Nobody with a good car needs to be justified,” (p. 64) という言明から推し量るならば、「車」はより

深い意味を持つものであり、霊的に救済される物体であるという解釈も可能ではないだろうか。

‘Justify’「義とする」については、聖書の中に多くの記述がなされているし、旧約と新約の福音書では差異がみられるのである。旧約の預言者は「公正と義を行え」と勧告した。新約の福音には「律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義としていただくためでした。」(ガラテヤの信徒への手紙 2 章 16 節)、「ただキリスト・イエスによる贖の業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」(ローマの信徒への手紙 3 章 24 節)。この聖書の指していることばの部分と照らし合わせて Hazel の言葉の解釈を試みるならば、彼は「立派な車を持っている者は誰も神の恵みや救いを必要としないのである」と捉えることができるのではないだろうか。彼にとっての車は‘spiritual home’「魂の安息の場所」とでもいうべき物体として考えなくてはならないだろう。そして彼はこの spiritual home を活用して、四回の説教を行う。²¹

一回目は、Hazel の説く ‘the Church Without Christ’ は、「目の見えない人は見えなままである、また足の不自由な人は歩かない、死者は生き返らないし、イエスの血が贖罪で汚れていない教会」であると主張している。この説教は「マタイによる福音書」第 11 章 5-6 節の全くの対極を説いている。更に「墮落はないのである、なぜなら墮落に陥るために必要な元々の場がないからである、墮落がなければ贖罪もない、その二つがないから審判も必要ではない。ただイエスが嘘つきであるということだけが存在する。」これらの反福音的説教は、微塵の躊躇も感じさせることのない強さと、その強さゆえの屈折性を示しているように思える。

二回目は、「キリストのいない教会にはイエスはいない。しかしイエスのような人は必要である。新しいイエスが必要である。無駄にする血を持っていない完全に人間であるイエスが必要である。」と主張している。ここには十字架上のイエスに対する絶対的否定と、復活後のキリストに対する絶対的嫌疑の展開をみることができると思われる。これほどの強烈さでイエス・キリストを冒瀆する意識の類似性は、旧約聖書の預言者ヨブと重ね合わせることができる。²²

三回目は、「真理に至る道は冒瀆によるものでしかない。」この言説には神を冒瀆するという要素のみならず、Hazel 自身が堅持していると思われる真理を具現的に顕示して神への挑戦を誓ったように思える。

四回目は、「あらゆる真理の背後に真理はない。」と説いた時点で後戻りできない決定的選択をしたようである。彼独自の真理で立ち向かおうとするが、このことは旧約聖書に記述されている、荒野で預言者ヨシュアが民全員に告げたことば(ヨシュア記 24 章 14-15 節)に対する答えを出しているように思える。

『旧約聖書』の宗教は砂漠の宗教と言われている。ユダヤ教のヤーウェーは「ねたむ神」であり、命令をきく者にはこの上なく優しいが、命令をきかない者には徹底的にこれを「裁く神」となるのである²³

聖書における預言者の活動の起源はきわめて古い。そして旧約聖書と新約聖書では預言者の担う役割は異なっていると解釈されている。オコナーは Hazel の説教に彼女のカトリック作家として内包すべき神学的真理を盛り込んでいる。

The universe of the Catholic fiction writer is one that is founded on the theological truths of the Faith, but particularly on three of them which are basic—the Fall, the Redemption, and the Judgment. These are doctrines that the modern secular world does not believe in……and the images and actions he creates may seem distorted and exaggerated to the Catholic mind. (*Mystery and Manners*, p. 185)

‘Faith’ ‘Fall’ ‘Redemption’ ‘Judgement’ 等、オコナーは神学用語を彼女の文学的手段として駆使している。さらに “distorted and exaggerated” と述べているように、強烈な手法を用いて彼女の小説作法に衝撃を与えることを意図していると思われる。

10 章に登場する詐欺師 Hoover Shoats は Hazel と瓜二つの Solace Layfield を詐欺の道具として雇い入れる。Hazel と同じ衣装を着せられて、教えられた説教をオウムのように繰り返すだけの南部の貧しい白人達の一人であるが、オコナーは決して彼を見放してはいないし、蔑んでもいない。一見グロテスクで道化的な人間に見えていても ‘hubris’ ではない人間として描いている。さらに eye dialect を効果的に生かして異様さとリアルさを強調している。“A man has to look out for hisself,” (hisself が eye dialect である) と言い、Hazel に轢き殺されて、息が絶えようとする時に罪の告白を行い、最後にイエスの名前を叫んで息を引き取る。ここにはキリスト教徒としての最も純粋な振る舞いの結末を見ることができるとと思われる。そして犯人である Hazel が「黙れ」と言いながらも彼の告白を聞くために頭を近づける。この意識的行為こそがオコナー小説のストーリーを支える重要な役割を果たし、そのうえ物語りを展開させる意図的な手順であり、宗教的価値の振じ曲げであると考えられる。Hazel はイエスを冒瀆し、殺人を行い、告白を聞く行為（司祭の行為）までも行った。この数々の悪魔的とも言える闘争の行為は ‘mystery’ のヴィジョンへと到達するのである。

Mystery の存在を表すために理性的ヴィジョンの行使を必要とする、と先に述べた。そのための劇的工夫がオコナーの言う、‘death-in-life-symbol’ (*Mystery and Manners*, p. 172) であり、“the devil accomplishes a good deal of groundwork” (*Mystery and Manners*, p. 172) と言えるだろう。ここでは車がその役割を果たすのである。車は説教台、殺人凶器、隠れ家、移動手段、さらに魂の安息場所とも言える symbol であるが、「義」とされ、魂の

救済となる予告が警官によって唐突に示される。殺人を行った都市を離れて、他の都市に移動しようとしていた矢先に警官の「お前の顔が気に入らない」という理由から、車は土手から突き落とされる。“Much of my fiction takes its character from a reasonable use of the unreasonable” (*Mystery and Manners*, p. 109)。不条理な理由のために車を破壊されるが、このことは Hazel が理性の行使を始めるきっかけとなるのである。

Hazel は空間(space)を凝視して意識を集中した後、3時間費やして歩き、やつのことで去ろうとしていた都市にたどり着く。直ちにバケツと石灰を購入して下宿先に帰るのである。彼にとってこの‘space’こそが 10 歳から心の中を支配してきた「永遠なるもの、魂の救済の希望」的なヴィジョンに繋がるものではないだろうか。つまりこの目に見えない大きな力を及ぼしているのが‘space’なのではないだろうか。Hazel にとっては 12 歳の時に彼に手招きしたイエスの姿であり、祖父が説いた「罪の海原」(the waters of sin)から自由になりたいという願望と、彼自身が説いた「信仰、堕落、贖罪、最後の審判」など存在しない事を実証したいという願望のジレンマを全て包み込む‘space’ではないだろうか。オコナーはこのジレンマから脱出するべき具体的な行為の積み重ねを物語りの中に盛り込むのである。まるで儀式でも行うかのようなその行為は彼女のヴィジョンへと移行するようである。

Hazel はイエスの手招きに応じる決意をする。初めての苦行を行った時には‘sign’は顕われずに神は沈黙したままであった、それは旧約の民が神の沈黙からくる苦悩を心に刻み込んだように Hazel も刻み込んでいた。しかし自らの目を潰して過去の冒涇を清算するべく苦行を行う今の彼の姿は、荒野を彷徨う旧約聖書の預言者エレミヤの姿と重ねあわされていく。エレミヤがイスラエルの民に呼び掛ける²⁴ように、Hazel は下宿屋の女主人 Mrs. Flood の魂に呼び掛ける。それに対して最初 Mrs. Flood は “Who’ s he doing this for?” “What’ s he getting out of doing it?” “What do you walk on rocks for?” (p. 125) , “Crazy fool,” (p. 126) と言っている。Hazel が行う苦行の初期の段階では、Mrs. Flood は南部の平凡な未亡人の視点で見ているが、有刺鉄線を胸に巻き付けて寝ている極限状態の姿を目撃して恐怖に震えて取り乱して言う。“it’ s not normal. It’ s like one of them gory stories, it’ s something that people have quit doing-like boiling in oil or being a saint or walling up cats,” (p. 127)。しかし Hazel は懊悩する素振りすら見せずに、ただ “I’ m not clean” (p. 127) とだけ答える。Mrs. Flood は “You must believe in Jesus or you wouldn’ t do these foolish things. You must have been lying to me when you named you fine church. I wouldn’ t be surprised if you weren’ t some kind of a agent of the pope or got some connection with something funny.” (p. 127) と言う。この Mrs. Flood の「あなたはイエスを信じているに違いないわ、さもないとこんな気狂いじみたことをするわけがない」という言葉には Hazel の行為による告白が真理へと移行してしている様子を端的にかつ平易に表しているようである。

旧約聖書の預言者達が行った苦行の行き着く結末は「神の奥義のなかに」(詩編 73 章 17

節) 入っていくのであろう。ましてやエレミヤのように神に対する反抗を繰り返してからふたたび悔い改めに移っている(エレミヤ 15 章 10-19 節) Hazel の行為はオコナーの統括されたヴィジョンであることは疑いのないものであろう。

まず Mrs. Flood の中にも新しい意識が芽生えることが確認できる。“She was not religious or morbid, for which every day she thanked her stars.” (p. 119) “I believe that what’s right today is wrong tomorrow and that the time to enjoy yourself is now so long as you let others do the same. I’m as good, Mr. Motes, …not believing in Jesus as a many a one that does.” (p. 125)

この言説には、ささやかな日常生活を通して高慢な自負心を持ち、それに浸る人、つまり「貧しい人」(詩編 22 章 25-27 節) とか「乏しい人々」(詩編 69 章 34 節) と呼ばれる人とは対極に位置する人の意識を指し示していることが読み取れるのである。オコナーのヴィジョンに照らせば、なにものにも従属することを拒み、神に等しいものとなろうとする思い上がる類いの人として見ることも可能であろう。しかし、この意識が変化を見せるのである。Hazel の行為を逐次見ることによって沸き起こる、新しい種類の意識が支配するようになってくるのである。

She shut her eyes and saw the pin point of light but so far away that she could not hold it steady in her mind. She felt as if she were blocked at the entrance of something. She sat staring with her eyes shut, into his eyes, and felt as if she had finally got to the beginning of something she couldn’t begin, and she saw him moving farther and farther away, farther and farther into the darkness until he was the pin point of light. (p. 131)

Mrs. Flood は盲目の Hazel が彷徨い歩いて倒れ込んでいた溝の中から警官によって引きずり出され、自分の元に戻って来た時に、すでに死んでいるにも関わらず自分のベッドに寝かせて優しく話し掛け、彼を見守りながら心の中で瞑想する時、かつての人生の中では思い付かなかった種類の意識である愛という感情を抱いたのだった。慈しみを含んだ情愛である。それはあたかも女が我が身に孕んだ子を愛おしむ情愛ではないだろうか。Mrs. flood の中に射し込んだ “the pin point of light” (光りの針の先ほどの一点) が Hazel の冒流する闘争心と Mrs. Flood の高慢な自負心を裁くかのように小さく鋭く光るのである。

VI

オコナーは最終章で “farther and farther into the darkness until he was the pin point of light” と書き、物語りを終えている。「どんどん遠くの暗闇の中へ動いていく、そしてついに彼は光りの針の先ほどの一点になった。」この「暗闇」‘darkness’ は一章の Hazel

が心の奥で確認した場所と重ねあわせることができる。

Later he saw Jesus move from tree to tree in the back of his mind, a wild ragged figure motioning him to turn around and come off into the dark where he was not sure of his footing, where he might be walking on the water and not know it and then suddenly know it and drown. (p. 11)

上記の一章における「暗闇」「dark」は最終章の「暗闇」「darkness」と同じであると解釈するならば、「皺くちやのぼろをまとった姿が彼に振り返って暗闇の中へ落ちるようにと身ぶりで合図している」場所となるが、一章における少年期の Hazel が心の奥で確信した「暗闇」はそこから逃れるための「暗闇」であるが、最終章の「暗闇」は彼が召される「暗闇」である。両「暗闇」は対極をなすものである。逃れるために激しく繰り返した闘争的とも言える冒涇の数々をオコナーは明白なヴィジョンで具現し、最後にそのヴィジョンが一体化される。

Miles Orvell が指摘する。“Hazel Motes’ death at the end of *Wise Blood*—seemingly lonely and miserable—is pitiable……., there is something unmistakably salutary about it, for it signifies Hazel’ s hard-fought redemption.”²⁵ この指摘のように最終章での Hazel の死によって完結する物語りを Hazel の贖罪物語と解釈するだけでなく、さらに物語りの意味を追求すれば、それは旧約聖書の預言者的役割を担ったものであると言いたい。呪い、憤慨、怒りという感情で神と格闘し、社会から疎外されて孤立した預言者達を Hazel の物語りと重ねあわせることができる。この物語りのトーキンハムは旧約の預言者エレミヤが嘆いた、荒れ野のかれた川であり、Hazel を取り巻く人物たちは、預言者を扇動したその当時の人民達であると考えれば、まさに *Wise Blood* は旧約物語りで活動した預言者達のアナロジーと考えてもよいのではないだろうか。

注

*本稿における *Wise Blood* の引用は、全て Flannery O’ Connor, *Collected Works*, (New York : The Library of America, 1988)によるものである。

1. Henry Louis Mencken (1880-1956) : アメリカのジャーナリスト、批評家。彼の批評は、当時の社会、政治、宗教、文学などアメリカ文化全般に及び、特に中産階級の偽善的な俗物主義、ピューリタニズムの攻撃に向けられた。
2. Flannery O’ Connor, *The Habit Of Being* ed. Sally Fitzgerald. (New York: Farrar Straus & Giroux, 1979)

3. Flannery O' Connor, *Mystery and Manners* ed. Sally and Robert Fitzgerald. (New York: Farrar Straus & Giroux, 1979)
4. 大江健三郎『人生の習慣』(岩波書店、1992 年) p. 221
5. 大江健三郎『人生の親戚』(新潮社、1989 年)
6. 大江健三郎『人生の習慣』(岩波書店、1992 年) p. 238
7. O' Connor, *Mystery and Manners*, p. 29
8. Ibid., p. 103
9. 「奥義」: 黙示文学的用法の場合、つまり神がある特定の人だけに啓示する隠された計画をさす場合は“秘義”、啓示によって万人が近づきうるものとなった神の深遠な考え(たいていは神の救済計画)を意味する場合は“奥義”である。『聖書思想事典』p. 133-136 を参照
10. Kathleen Feeley, *Flannery O' Connor Voice of the Peacock* (New Jersey: Rutgers University Press, 1972) p. 61
11. 'Blood' についての解釈は「マタイ 26 章 26-28 節」、「マルコ 14 章 22-25 節」、「ルカ 22 章 17-20 節」、「コリント 11 章 24-25 節」参照。聖書テキストは 1987 年版新共同訳に従った。
12. "Haze is saved by virtue of having wise blood; it's too wise for him ultimately to deny Christ", O' Connor, *The Habit Of Being*, p. 350
13. Marshall Bruce Gentry, *Flannery O' Connor's Religion of the Grotesque* "many O' Connor characters have a very limited, fragile sense of their community; in addition to renouncing a dead, abstract version of their community, most of the characters renounce most of the rest of the world." (Jackson: University press of Mississippi, 1986) p. 164
14. ① "There is an even worse bias than these two, and that is the clinical bias, the prejudice that sees everything strange as a case study in the abnormal. Freud brought to light many truths, but his psychology is not an adequate instrument for understanding the religious encounter or the fiction that describes it." O' Connor, *Mystery and Manners*, p. 165
- ② "In any case if the Oedipus business is visible in it, it is so because it is in nature, not because I worked with that in mind. I don't think any good writer would do such a thing." O' Connor, *The Habit Of Being*, p. 375
15. 創世記 2 章 7 節、3 章 19 節参照
16. O' Connor, *The Habit Of Being*, p. xv
17. "The fiction writer should be characterized by his kind of vision. His kind of vision is prophetic vision. Prophecy, which is dependent on the imaginative and not the moral faculty, need not be a matter of predicting the future." O' Connor,

Mystery and manners, p. 179

18. 詩編 133 章 2-3 節参照

19. 『聖書思想事典』は、旧約聖書と新約聖書において、アロンの位置づけは異なると解説している。この論文では旧約聖書からの解釈を用いる。シラ書 45 章 6-22 節参照。

20. “I would like to stress Haze’ s use of the car to make his protest, much as Saul persecuted the Christians and then was knocked off his horse to begin his journey of becoming St. Paul.” David R. Mayer, *Drooping Sun, Coy Moon* (KYOTO: Yamaguchi Publishing House, 1995) p. 117

21. “Well, I preach the Church Without Christ. I’ m member and preacher to that church where the blind don’ t see and the same don’ t walk and what’ s dead says that way ask me about that church and I’ ll tell you it’ s the church that the blood of Jesus don’ t foul with redemption...I’ m going to preach there was no Fall because there was nothing to fall from and no Redemption because there was no Fall and no Judgement because there wasn’ t the first two. Nothing matters but that Jesus was a liar. ” (p. 59)

“The Church Without Christ don’ t have a Jesus but it needs one! It needs a new jesus! It needs one that’ s all man, without blood to waste, and it needs one that don’ t look like any other man so you’ ll look at him. Give me such a jesus, you people.” (p. 80)

“The only way to the truth is through blasphemy, but do you care?...” (p. 84)

“I preach there are all kinds of truth, your truth and some body else’ s but behind all of them, there’ s only one truth and that is that there’ s no truth,” (p. 93)

22. 井上洋治『キリストを運んだ男』（日本基督教団出版局、1988 年）pp. 40-43。井上によれば、ヨブは初期の段階では主我的段階にとどまっていたのだが、さまざまな苦悩をへて、「神の前に悔い改める」無我的段階へ入った。

23. 上記、p. 82

24. 『聖書思想事典』（三省堂、1986 年）pp. 296-297

25. Miles Orvell, *Invisible Parade* (Philadelphia : Temple University Press, 1972) p. 174